

促成イチゴの新品種 ‘熊研い548’ の育成と特性

田尻一裕・三原順一・石田豊明・西本 太<sup>1)</sup>  
(熊本県農業研究センター・<sup>1)</sup>熊本県食品加工研究所)

Kazuhiro Tajiri, Junichi Mihara, Toyoaki Ishida and Hutoshi Nishimoto :  
Breeding of the forcing strawberry ‘Kumaken-I-548’ and its characteristics

本県イチゴ生産における省力化と品質向上を図るために、省力的で食味、果実品質の優れた県オリジナルの促成イチゴの新品種開発に取り組み、当研究センターで促成イチゴの有望品種 ‘熊研い548’ を育成したので、その育成経過と特性について報告する。

1. 育成経過

2000年春に当研究センターで育成した、草姿が立性で糖度が高く果皮の硬い ‘98-30’ (‘さちのか’ × ‘栃の峰’) を種子親に、草勢が非常に旺盛で立性を有し果実が大果の ‘98-20-3’ (‘久留米54号’ × ‘栃の峰’) を花粉親として交配した。実生個体105個体を養成し、促成栽培で優秀な形質を有する22系統を、無電照、ジベレリン無処理の条件下で選抜した。2001~2002年に促成栽培でこれらの系統の中から草姿、果実の着色、食味の優れた1系統を選抜し、同時に生産力検定を実施した。その結果、収量、品質、食味、商品果率等で良好な結果を示し、実用品種としての評価が得られたので、2003年に ‘熊研い548’ の名称で種苗法に基づく品種登録出願を行った。

2. 特性

‘熊研い548’ は草姿が立性で、‘とよのか’、‘さちのか’と比較して、分けつ数と花房当たりの花数が少なく、摘果など管理が少なく、また果房の果梗伸長のためのジベレリンは不要であり省力的である。ハウス内での通常栽培では、冬季においても無電照条件下でもわい化がほとんどなく、電照は不要で、休眠が浅く、短日でも生長・開花しうる暖地向き促成品種である。

頂花房の花芽分化期は ‘とよのか’ よりやや遅く、‘さちのか’ と同程度である。

果実は ‘とよのか’ より大きく、果形は短円錐~円錐形で、果皮は鮮紅色で光沢が良く、‘とよのか’ に比べ果肉硬度は高いが、果皮は軟らかい。

無電照条件下での商品果収量は ‘とよのか’、‘さちのか’ と同等以上で、商品果率が高い。

糖度は安定して高く、酸度は ‘とよのか’ より低く、‘さちのか’ より高い。収穫期間を通じて食味は優れる。‘とよのか’ より炭疽病に弱い。

第1表 形態的特性

品 種	草 姿	草 勢	葉 色	小葉の大きさ
熊研い548	立性	強	緑~濃緑	大
とよのか	開張性	やや強	濃緑	やや大
さちのか	立性	中	濃緑	中

第3表 頂花房の花芽分化期

品 種	2001年	2002年
熊研い548	9月16日	9月19日
とよのか	9月13日	9月17日
さちのか	9月16日	9月20日

注) 農研センター野菜研究室において花芽分化程度が肥厚後期に達した日。

第2表 分けつ数と花数

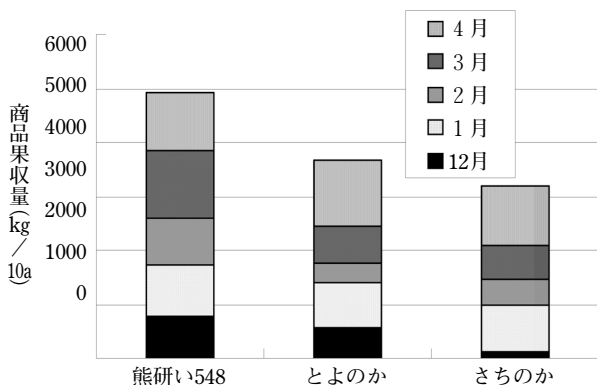
品 種	分けつ数	頂花房の花数
熊研い548	1.3	8.1
とよのか	1.5	12.1
さちのか	1.8	13.8

第4表 果実特性

品 種	形 状	果皮色	果肉色	光 沢	平均果重 g	商品果率 %
熊研い548	短円錐~円錐	鮮紅	白	極良	18.7	91.8
とよのか	円錐	鮮紅	黄白	良	12.5	80.6
さちのか	長円錐	濃赤	淡紅	やや良	12.1	80.5

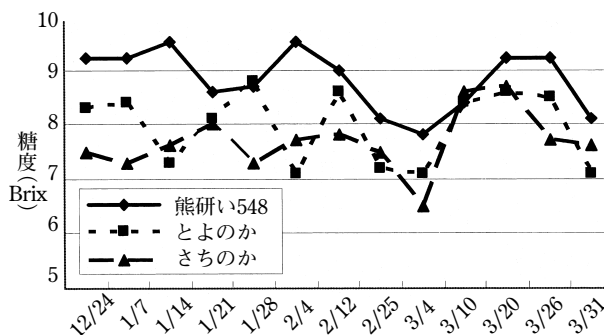
注) 分けつ数：1月10日調査。

注) 平均果重、商品果率は普通ポット、無電照、無摘果栽培。



第1図 月別商品果収量 (2002)

注) 2002年度試験結果  
普通ポット、無電照、無摘果。



第2図 果実全体の糖度の推移